



イワクラ紀行「甲斐の巨石巡り」

会員 皆神 隆（超歴史研究会）

甲斐の国、山梨県は今年「風林火山」で盛り上がりをみせて いるが、ここには多くの巨石遺構が存在する。富士山の北側、甲府盆地のなかでも特に、竹田家の菩提寺である「乾徳山惠林寺」に近い山梨市周辺には、石の信仰が明らかに残されている。街を歩くと、路傍に祭壇風の台が置かれ、その上に丸い石が幾つも積み上げられているのを目にする。なかには石がひとつだけのものもあり、また無数に積まれているものもある。石の直径は、数センチから最大1メートル程度である。これを地元では「丸石神」と呼んでいるが、石信仰のひとつの形態である。その数は200とも300とも言われているが、近世のものが多いようと思われる。現在でも新たに石が供えられて祀られている。信仰の起源は古代まで遡ることがあり、今もその信仰は続いている。信 仰の起源は古代まで遡ることがあり、今もその信仰は続いている。



ついては謎につつまれている。

中米コスタリカには、ディキス・ストーンボールという謎の石球が存在するが、なかには惑星の配置を表しているものもあるようである。コスタリカの密林あるいは高山のなか、さらに川のデルタ地帯や丘の上に数百個の人工的な石の球が存在し、その直径は数センチのものから2m50cmに及び、これまで発掘された

最も重い石球は、16トンに達する。このコスタリカのストーンボールと関連があるのかどうか、それは不明であるが、特異な信仰形態である。

こちらの「丸石神」は、道祖神のように祀られていると考えられ、道しるべの役割も果たしている。庚申の石碑や、蚕神（蚕影山）と並んで祀られている場合もあり、いろいろな信仰の結びつきも見られる。



多くの「丸石神」が道祖神として祀られているが、道祖神とは、塞の神や道返しの大神ともいい、路傍に立つて旅の安全を守つたり、悪霊が村や町に入つてくるのを防いだりする神である。道祖神の信仰は全国的なものであるが、その多くは陽石や陰石を表す自然石、あるいは石像である。男女双神の石像もあり、性神的なものも多いが、道祖神が丸石というのは珍しい。民俗学では、丸石



は縄文遺跡から出土する「御靈石（みたまいし）」の信仰に通じると考えられており、丸石は大地の生命がこもる「卵」になぞらえられたものといわれる。これはつまり、卵生神話につながるということ。また、丸石が蚕の繭にも似ていることから、その信仰の結びつきが生じたものと考えられる。



には自分の足で探すしかない。それでも、次々と色々な形や大きさの違う「丸石神」を探して歩くのは、好奇心を刺激されて楽しいものである。「丸石神」は甲府盆地のなかでも、特に山梨市と甲州市の一帯に集中している。前出の恵林寺を中心とした地域になるが、その関係は現状不明である。付近の神社の境内にも、多く見られるので、探訪の際には神社にも立ち寄ることをお奨めする。



「石森山」は日本書紀の頃、日本武尊が御東征の折に立ち寄つたと伝えられ、この山に岩石と森林があつたことから、石森山の地名がついたと



記されている。高さ30mほどのマウンド状の丘であるが、その上には「山梨岡神社」が祀られ、周囲には数多くの巨石が点在する。また、その丘の裾野の部分に巨石が積み上げられた場所があり、前には池があつて、巨石庭園のようになつてている。伝説によれば、この丘は東北5kmにある塩山とともに、その昔巨人レイラボッヂが築いたものだという。

「日本武尊御腰掛石」をはじめとして、「鳥帽子岩」「屏風岩」「船石」、

さて、このように石の信仰が残る山梨市周辺であるが、ここにはもちろん多くの巨石が存在し、巨石信仰も残されている。その幾つかを紹介しよう。まず、第一に山梨市石森にある「石森山」である。



山梨岡神社

「兜石」、「要石」、「獅子石」、「朝日崔」など、それぞれの石には名前が付けられており、石森山案内図にはその詳細な位置と名前が分かれやすく記されている。頂上付近にある「朝日崔」は、二つの石の間から朝日が昇るように配置されている。ここは街の中央部で、住宅地のなかにあるのだが、まさに石の遊園地といった景観を呈しており、石好きには最高の場所である。



石森山 兜石

余談になるが、近頃、山梨県韮崎市において、「女夫石遺跡」が発掘され、縄文時代中期の約5500～4500年前に、巨石を中心として約1000年間にわたって何らかの祭祀が行われていたことが分かった。写真は裂け目のある巨石に祀られた石棒の出土状況である。この巨石を中心として、約70点もの土偶、石棒、ミニチュア土器、さじ状土製品などの非日常的な道具が壊されたま



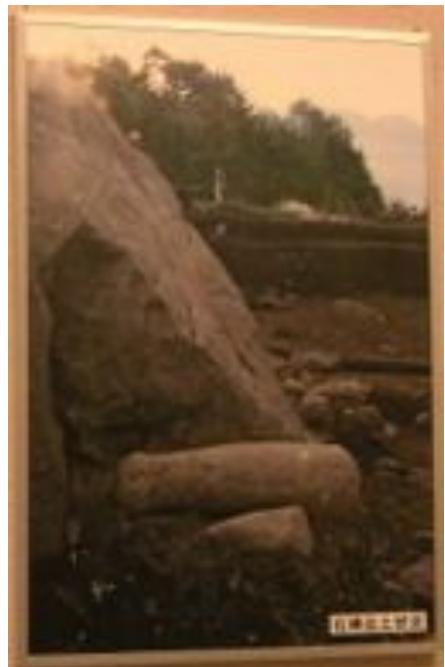
石森山 朝日崖

まの状態で発見された。

この巨石の近くには、配石遺構もあり、明らかに祭祀行為が行われていたことが明確であり、巨石が埋没したことによって、集落が終焉を迎えたことが伺えるという。

これは、文化庁の「発掘された日本列島2007」にて発表されたものであるが、この山梨県には縄文中期より巨石信仰があつたことが証明されたのである。

次は石森山の北方にある「大石神社」である。こちらは、郊外の田園



女夫石遺跡



大石神社

特に拝殿の後ろにある「御影石」と「影向石」が並ぶ姿は圧巻である。「御影石」の裏側にははしごが掛けられており、その上部に登ることができるようにになっている。写真では上に人が写っているのであるが、この石の巨大さがお解かりになるであろうか。

地帯になるが、「大石山」には大山祇命を祀る「大石神社」がある。拝殿の背後の巨大な「御影石」は御神体で、高さ12m、周囲が67mあって、県内最大といわれる。「鳥帽子岩」、「屏風岩」、「影向石」、「産屋石」、「浮舟石」、「百足石」、「指門石」、「甲石」など、全山の奇岩群は目を見張るものばかりである。この地には古くから奇岩群を訪れる文人墨客、観光客などが跡を絶たないというが、ここ の石はスケールが大きく、その存在感に圧倒される。この山の上に、どうやってこのような巨大な石を配置できたのであるうか。

特に拝殿の後ろにある「御影石」と「影向石」が並ぶ姿は圧巻である。「御影石」の裏側にははしごが掛けられており、その上部に登ることができようになつていて。写真では上に人が写っているのであるが、この



大石山 影向石



大石山 浮舟石 (その後が御影石)



花後薬師の杜

また、大石神社の北側には小さな丘があるが、そこには巨大な岩塔が屹立しており、その下には「花後薬師」の小祠がある。その小祠のなかには丸石が祀られており、丸石神とのつながりも見られる。離れてみると、木が多く生えているために、それほど岩が目立たないのであるが、その岩塔の周りには、多くの岩が累々と積まれており、祭祀空間が形成されているようである。隣の大石



花後薬師

山との関連がどうなっているのか、連携したときの意味合いがあるのかどうか、それらは今後の調査が待たれるところである。

大石山のさらに北、山間部に入つて行くと、葡萄畑の広がる牧丘には「立石神社」がある。社殿の裏には巨大なメンヒルが屹立し、こちらを見下ろしている。その奥へ林のなかを進むと、奥社があるが、その裏の小山の中には数多くの巨石が存在す



立石神社

る。ここは前の石森山、大石山とは違つて整備されておらず、石には名前が付けられていない。しかしながら、ここに石もすばらしく、その迫力は前の二箇所と並ぶほどのものであり、今後の整備、保存が望まれる。裏山の山中には、岩門のようになつていて岩や、扇形に配置された岩、二つに割られて置かれたような岩など、様々な岩が点在している。植林のために、岩がだんだん見えなくな

つてきているのが残念である。



立石神社の立石



さらに、石森山の西方には「兜山」という山がある。「兜山」は、標高913m、「甲斐国志」に「大岩突出シテ黒鉄盔（かぶとはち）ニ似タリ」と記されている。その麓には「御幸石」という巨石があり、その昔、一宮町の浅間神社の祭典で、神輿がこの道を越して積翠寺を経て武田の館に向かい、釜無川に祈願したと言われており、御幸石の付近が神輿の休息の場所として伝えられている。御幸石近くにあり、今もハイカーのための休憩所が設けられている。兜山は兜を伏せたような形



兜山遠景

の美しい山であるが、その山中にも多くの

石が存在し、イワクラらしき雰囲気が見られる場所もある。

山道は、岩場コースと山腹コース

に分かれているが、岩場コースの途中の岩場からは、甲府盆地が一望に見下ろせ、正面に富士山を望むことができる。残念ながら山頂からの眺望は乏しい。現在は、兜山の前にゴルフ場があるために、徒步で行く場合には大きく迂回する必要があり、「御幸石」まで辿り着くのも一苦労といった状態になっている。岩場コースの岩は、ごく自然な状態であるが、山中には趣きのある岩が多く存



御幸石



在し、祭祀が行われていてもおかしくはないと思われるが、現在まで残らなかつたのであろうか。



最後に、山梨市の東隣、甲州市の甲斐大和には、竜門峡という峡谷があり、奇岩と滝などが自然美を織り成しているが、その途中には「平戸の石門」という岩門が存在する。さらに途中には、「木賊の石割けやき」、

山梨県指定有形文化財となつていて、「地蔵菩薩磨崖仏」、「文殊菩薩磨崖仏」があるが、その庭園には「靈石



平戸の石門

「梅見の洞穴」などの他、石積みと見られる場所もある。渓谷沿いのハイキングに最適なコースであり、その先には「栖雲寺」という禅寺がある。栖雲寺は、鎌倉末期の文保年間に法を求めて中国に渡った業海本淨和尚によつて1348年に開かれた。

泉」、「梵音洞」、「座禪石」、「忿怒岩」などと名付けられた多くの巨石が散在しており、石好きの目を楽しませてくれる。

「栖雲寺」は、もともと巨石信仰があつた場所に造られたものと思われるが、山梨県では磨崖仏は少なく、ちょっとと異質な信仰が見られる場所である。

ちなみに、竜門峠の手前には「景德院」があるが、ここが武田家最後



竜門峠の石積



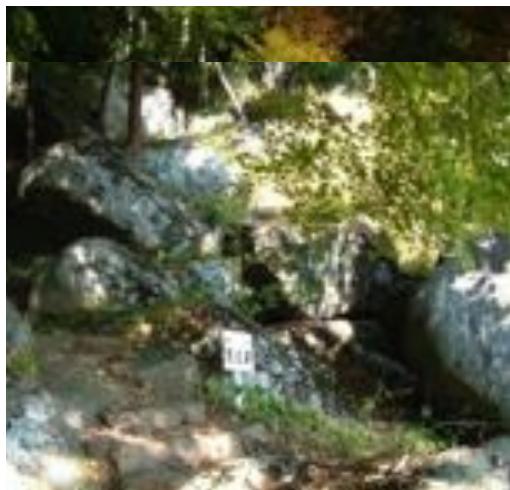
栖雲寺の庭園

の武将勝頼公及び同夫人、子信勝並びに將卒ら約50名が自害した地である。徳川家康が甲斐に入国後、勝頼ら將士の菩提をとむらうため、ここに田野寺を建立した。それが今の景德院であり、境内には勝頼親子が自害されたところと伝えられる「生害石」などがある。

以上、今回紹介した石は、山梨市の駅から半径10km以内の範囲に全て収まっているということから、



栖雲寺 忿怒岩



栖雲寺 梵音洞

この地域が石信仰の中心地ではないかと思われる。ここが富士山のほぼ真北の方角にあるといふことに、何らかの意味があるのかもしない。

了

超歴史研究会 ツヅク：
<http://www.page.sannet.ne.jp/tsuzu>
ki/